

こころ、からだ、いのち

中野 重行

大分大学名誉教授／大分大学医学部創薬育薬医療コミュニケーション教授／
国際医療福祉大学大学院 特任教授（創薬育薬医療分野長）

●62年ぶりの再会

夏の夏、62年ぶりの出来事があったのです。何十年ぶりだと沸いたロンドンオリンピックの日本選手のメダル獲得のことではありません。真正正銘、わが身に起こったことです。小学4年生のとき、担任をしていただいた先生にお会いしたくなり、お盆に郷里の岡山に帰った際に、先生のご自宅を探して、お会いしたのです。先生は5年前に脳梗塞になり、左半身に麻痺が残って杖を使った生活ではあるのですが、幸いなことに言語機能と右手の書字機能は全く問題なく保持されていて、とてもお元気でした。お会いしてすぐに昔に戻り、時空を超えた師弟の会話を、3時間近くにわたって懐かしく楽しんだのでした。

いまから考えると、先生の教師としてのキャリアの駆け出しの時期にあたるのですが、とても「羨け」の厳しい先生で、丸めた本で生徒をよく殴っていました。いまだあれば新聞沙汰になるかもしれないようなことは、第二次世界大戦の終戦後間もない当時の小学校では、珍しいことではありませんでした。私は殴られた記憶はないのですが、生徒のことを思っただけで叱っていることが、生徒にも伝わってきていて、自分の気分で生徒を突き飛ばしたりしていたような先生とは、子供心

にも違うことが分かっていたように思います。子供の成長盛りの時期に、とても有意義な1年間を過ごした思い出として残っているのです。

実は、二十年ほど前、お世話になった先生のことを思い出すことがあって、居場所を探し出していました。普通だった小学校を通して、探し出してもらったのです。それ以来、年賀状が毎年行き来するようになりました。小学4年生といえ、まだ9歳です。当時の先生の言動を思い出しながら、話題にしたところ、先生にとっては当然のことながら「そんなことがあったかな」「その頃は、毎日、野口英世の伝記を生徒に読んだりしていたので、そんな感じだったろうな」といった感じてした。

●「師弟」という特殊な人間関係

さて、この話を冒頭に取り上げたのは、今回は「師弟」という特殊な人間関係について、考えてみたいと思ったからです。半世紀を超えても、恩を感じる気持ちが心の中に生き続けていることの意味について、考えてみたいと思ったのです。すべては「師」の側のある想いから出た言動から始まるのですが、永続する影響を受けた側の「弟」のほうに、大きなウェイトがあるように思うのです。また、実際には会ったこともない、あるいは生きていた時代や国が異なっているにもかかわらず、その人の書き残した書物から大きな影響を受けるということもあります。その人の著作をのめり込むほど読み込んで強い影響を受けたのであれば、「師」のほうにどうであるかにかかわらず、「弟」にとっては、やはり人生の「恩師」と言っているのではないのでしょうか。

ここまで書いて、あるエピソードを思い出しました。もう十数年前の話になるのですが、当時の大分医科大学の学長から、大学入学試験の面接試験のあり方を改善したいこと、従来の「個人面接」に加えて「集団面

連載②

人と出会い、恩師を思い、人として育つ

正解のない問題を課した
大学入学面接試験のエピソードから

接」を取り入れて、将来良き医師となる適性を評価して、積極的に加点する方法を考えてほしいこと、その責任者を務めるようにとのミッションをいただいたのです。すぐに思いついたのは、一見答えがありそうでいて、実は唯一の正解はないような医療の雰囲気の出る課題を与えること、さらに、集団で合意を得るという注文を付けるのがよいのではないかとということでした。理由は簡単です。受験勉強では常に正解のある問題を、個人で、短時間のうちに解く訓練をしてきた人たちが、集団面接の特徴は、人間同士の関係の取り方、つまり人間性（誠意と情熱）とコミュニケーション能力（自分の考えを分かりやすく相手に伝え、相手の話をしっかりと聴いて理解する能力が基本）を観ることができる点にあるからです。

具体的には、次のような課題を4名1組の各グループに課すことにしました。「ここに「がん」患者が4人います。小学6年生の女の子、大学受験生の息子を持つ40歳の母親、60歳の開業医、80歳の地元有力政治家です。抗がん剤は3人分あります。さて、あなたはどのようにこの抗がん剤を使いますか。まず自分の考えを紙に書いてください。その後、お互いに自分の考えを発表し、グループとしての方針を決めてください。（合計90分）」

集団面接試験では、受験生のいろいろな言動が見られました。自分の考えと異なる意見が他人から出されたとき、さてどうするか。「子供は将来性があるので救いたい」「受験生がいる母親は救いたい」「開業医は多くの患者を抱えているから救わなければならない」「地元有力政治家はすでに社会貢献はしただろうし、将来性は少ないので後回しでもよいのではないか?」「いやそんなことはない。誰でも周りに、亡くなると悲しむ家族がいる。命の重さには変わりはないのではないか」など、数々の意見が出たのです。中には、説得力を評価されていると勘違いしたのか、あるいは本来の性格なのか、自分の最初に考えた方針を最初から最後まで主張し続ける受験生もいました。「自分たち

はまだ医学生でもないし、素人なので決められない。専門家を呼んで意見を聞いてはどうか?」「このような課題が解けるように、入学してから勉強したい」……中でも秀逸だったのは、「抗がん剤は3人分しかないという話であったが、実際にはこの3人分で4人の治療ができるのではないかと?」なぜなら、1人は子供で体が小さいし、もう1人は老人だから、この2人は必要量が少ないので1人分で足りるのではないかと?という発言でした。

●ある学生との語り合いの時間

しかし、試験官である筆者には、特に強烈な印象を残した一人の受験生がいたのです。彼は、九州の高校から、年末年始に花園で開催されるラグビー全国大会に出場した経験のある学生でした。グループの皆が窮しているとき、常に皆の考えを一步前進させようという熱い情熱の伝わってくる、まさにラグーマンらしい好青年でした。当然、高得点を与えました。その後、彼がどうなったのかは全く知りませんでした。その6年後に、なんと筆者の前に挨拶に現れたのです。入学後すぐ、自分の心に触れるものがあった面接試験官を探したこと、間もなくそれが筆者であることが分かったこと、面接試験のときのお礼の言葉を、卒業までにはどうしても筆者に伝えたかったこと、などを手短かに語ってくれました。筆者も面接試験のときの印象をよく覚えていたので、しばしの間、なかなか得がたい夢のような語り合いの時間を持ったのです。嬉しいことに、面接試験の際に感じたとおり、彼はよき臨床医になることを予感させる立派な医学生に育っていたのです。このような語り合いの機会が生まれるのは、あくまでも「師弟関係」の「弟」のほうに主導権があるもののようなのです。あるいは、「弟」のほうの心の状態に依存していると言ったほうがよいかもしれません。



なかの・しげゆき 岡山大学医学部卒。スタンフォード大学医学部臨床薬理学部門に留学。大分医科大学臨床薬理学教授、同附属病院臨床薬理センター長、大分大学医学部附属病院院長、大分大学学長補佐などを歴任。大分大学名誉教授。大分大学医学部創薬育薬医学教授、国際医療福祉大学大学院教授を経て現職。日本臨床薬理学会名誉会員（元理事長）、日本臨床精神神経薬理学会名誉会員（元会長）、日本学術会議連携委員、日本心身医学会認定医・指導医、日本臨床薬理学会専門医・指導医、日本内科学会認定医、臨床試験支援財団理事長。働き合いネットワーク連絡協議会理事長として、医療コミュニケーションを学ぶ全国的なワークショップ（大分、岡山、東京、長崎、山形、湯布院）の企画・運営に携わっている。
http://www.med.oita-u.ac.jp/pharmaceutical_medicine/index.html